
ゼロの使い魔 ～大樹の魔法使い～

神榛 紡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～大樹の魔法使い～

【Nコード】

N4408X

【作者名】

神榛 紡

【あらすじ】

ゼロの使い魔に転生する。それは未曾有の大災害との戦いを義務付けられ、戦争に強制参加させられ、お花畑なお姫様に振り回され、美少女を物にできる可能性のあるマイナス多き転生である。

これはとある少年に起こった、多大な不幸とそこからの脱却の物語である。

つい投稿しちゃった物です。滅多に更新しません。

説明回なプロローグ

はじめまして、ヴァルトリーベ・レルヒエ・シュペルリング・ド・ウングリュックです。ごさいです。

初っ端からふざけてみたけれども、俺は前世の記憶を持った転生者であり、現在生きている場所はハルケギニアのトリステインのウングリュック伯爵領の伯爵家三男だったりする。

そう。あのゼロ魔だ。設定曖昧。ご都合主義万歳。国際問題何それおいしいの？ なゼロ魔だ。

何度あの半ニート生活に戻してくれと思ったことか。

伯爵ならいいじゃないかと思うかもしれないが、衛生問題の重要さを三歳での身で説いたり、石でも舗装する事でいかに行軍や流通が良くなるかを説いたり、罪人を労働力として地下深くの風石を掘らせたり、民の大切さを説いたりしてきたが、不幸の名を冠する領地は伊達では無かった。

ボットントイレを作らせれば大雨で中身が溢れる。週一で中身を燃やしていたのを一日一回汲み上げて燃やす事に対応。するとピタリと雨が止んだ。なにそれこわい。

石で舗装すればメイジが固定化を怠りあちこちでひび割れ陥没が発生。速攻で人をやり修復、信用できるメイジに固定化を頼んでどうにかした。金が……。

罪人を労働力に領地の隅で風石を掘らせれば突然坑道が陥没。穴の深さに対して木材などの補強では足りていなかった事が判明。まさか罪人のためにメイジを派遣する訳にも行かず、別の労働へ罪人を使う事に。風石問題があ。

民の大切さを父に説いて、領地での理不尽な暴力を罰するようにすると、神官が難癖を付けて来た。正しい事して何で文句言われるんだボケと蹴り返せばどんなに良かったか。泣く泣く撤回するはめに。あのデブ神官いつか殺す。

— e t c . e t c .

一ミクロンでも隙があれば不幸が襲ってくるこの始末。父の手腕があるからこそ領地としての体裁を保ってはいるが、調べてみると神官の数が他の数倍だったり、どうも年間行方不明者が多数居たりと本気でヤバイのが我が領地だ。

領主から従っているメイジ集団まで割といい人ばかりなのに一体何故と言うしかない。

これで領主まで他の連中みたいに馬鹿だったら即効で廃領だが、そうじゃないのが唯一の救いと言いたいのだが、どうにも父のお人好しな性格に付け込まれて押し付けられたのが現実らしい。

他の奴だったら無法地帯になっていたからこれが最善だったんだと納得するしかない。

だが、そんなこんな不幸も乗り越え、俺もようやく五歳になったのだ。これが意味する事は非常に大きい。待ち望んでいた奇跡と言ってもいい。よく生き残った俺。育ててくれてありがとう父さん、母さん！

そんな俺は現在杖の契約中だったりする。

原作ではどうか知らないが、この世界だと杖には大抵銀が使われている。木の芯に埋め込んだり、剣に装飾として付属させたりと多々あるが、職人が一定のルーンを刻んだ物と契約するのが一般的だ。熟練の職人であればあるほど、小さくともきちん効力の発揮する物が作れるらしい。

その契約方法だが、実際に魔方陣の中でぶつぶつ言ったり、じつと意識していればいいという物ではない。

端的に言つと、己の魔力を注ぎ込み、杖となる物体を染め上げるのだ。

その難易度で言えば、銀を使ったルーン有りで一として、銀のルーン無しなら百、ルーン有りの銀以外の金属ならおおよそ二十、

ルーン無しの銀以外の金属なら百五十〜二百、木などの植物にルーン有りだと二百前後、無しで三百五十〜四百強、質が普通以上の宝石だと有りです〜五十、無しで百〜百五十、石だと有りで三百、無しで五百といった感じだ。

色々例を挙げたが、普通にメイジだと超努力して頑張つて、奇跡が起こってほしい二百くらい。タバサとかの天才だと死ぬ気で頑張れば四百くらいと考えてもらえばいい。ついでに言うとかいと難易度も上がるし時間も掛かる。小さければ銀を使って普通のメイジで一週間が目安だ。

あの年でデカイ木の杖を使っていたタバサは本当に規格外だったんだな、と思い知らされる次第。あと、独力で契約したティファニアも天才だ。キュルケも天才でルイズは虚無と、本当に原作中心人物の才能は嫌になる。初めてギーシュで癒される事を知ったくらいだ。

と言いつつ、俺の場合は財政状況もあってちよつと村の細工師に頼んで作ってもらった櫛の木製の杖と契約しよう頑張っているのだが。今日でもうひと月になるので、今日の夕方にでも魔法を試して使えなければ、普通に杖をおねだりしようと思っている。

「父様。杖の契約が出来たか魔法を使って確かめたいのですが、見ていただけませんか？」

「何を言っているんだ？ 半月くらいで契約できていただろう。てつきり自分で魔法の練習に入っている物だとばかり思っていたのだが」

「……………え？」

半月無駄骨？

基礎的な第一話

さあ、やって来ましたよ！

何かと問われれば家庭教師です。

クララー・シュバリエ・ド・グラージェさんです。二つ名は『鉄薔薇』で、父上に仕える家臣の中でも最強の呼び声高い優秀なメイジらしいです。

クララーさんは、灰色の髪をウルフカットにしており、凛々しい顔付きも相まってかなりの迫力がありません。スタイルも良く引き締まった体をしているのですが、結婚していないのは我が領地の呪いか、それとも彼女の雰囲気近寄り難いのか。

「ヴァルトリーベ・レルヒエ・シュペルリング・ド・ウングリュックです。今日からよろしくおねがいします」

「よろしい。ゴールド様から、ヴァルトリーベ様はとても聡明で理解が早く優秀だと窺いました。私としても、五歳でルーンも刻んでいないただの木の棒を杖とする才能に期待しています。そのような事ができるのは最低でもスクエアになれる素質がありますからね」

「はい。がんばります。あと、ヴァルでいいです。呼びにくいですよね」

「分かりました。では、ヴァル様とお呼びしましょう」

後になって聞いたのだが、杖を契約するのは相性があるらしい。

俺が呼んだのは火がメインのメイジが書いた書物であり、杖の契約は千差万別であり、共通しているのはルーンを刻まないと契約の難度が一気に上がるという事だけらしい。

まあ、それでも有機物との契約は難しい部類らしく、普通は無機物を木などで覆って見栄えを良くするらしい。契約するのは芯に使った金属などで、外装はオマケだそうだ。

俺のやった事は常識的に考えないような行為というのが泣けた。

「コホン。では、まずは基本的な魔法からやっていきましょうか。まずはこれです【念力】」

「石が浮きましたね」

「これは基本、自身で持てるような物を遠くから動かす魔法です。普通、日常で使う事はあまりありませんが、横着な人は念力で物を取ったりします。また、大きな物や重い物になると、動かせなかったり動いてもゆっくりになったりします。石でもせいぜい人が走る程度の速度しかできません」

言って、石をグルグルクルクル動かして見せてくれるが、確かに日常生活でも戦闘でもあまり使う機会は無さそうだ。せいぜい手の届かない場所の物を取ったり、奇襲する時に注意を別所へ向けたりする程度だろう。

クララさんからやってみるように言われ、念力のルーンを唱える。イメージは念動力で良く言われる第三の手。三つ目の手を伸ばして掴み取るイメージだ。

「我が意の元に動け、【念力】」

言葉と共に魔力が吸われる感覚があつて、同時に、ふわっ、と石が浮いた……のだが、それを見て集中が途切れてしまい、数センチ浮いただけでポトリと落ちてしまった。

「初めてで少しでも浮くとは素晴らしい才能です。これなら今日中に念力は覚えられそうですね」

「才能があるというなら嬉しいですね。早く父上や母上、兄上達みたいになれるように頑張ります」

「焦らずとも大丈夫ですよ。ヴァル様はまだ子供で、魔法も習い

始めたばかりです。きちんと努力していけば、すぐにも一人前の魔法使いになれますよ」

クララさんの言葉に頷き、もう一度浮遊を使う。すると、今度はきちんと浮かせられた。クララさんのように、石を同じ高さに留めておくのはまだ出来ないが、十分だろう。

それを過剰に褒めるクララさんの言葉を受け流して、次の魔法を教えて欲しいと願った結果、基本的なロック、アンロック、ライト、ブレイド等、基本的なコモンマジックを教わった。

「ミス・クララ。教えてもらってこんな事を言うのは変かもしませんが、系統魔法はやらないのですか？ 教わるのはコモンマジックばかりで、系統魔法は一個もやっていませんが」

「ヴァル様。ヴァル様は確かに聡明で秀逸した才を持っておられます。おそらく、いきなり系統魔法に飛んだところで、問題なく使えてしまうでしょう。ですが、何事も基礎が重要だという事を忘れてはいけません。基礎を飛ばして応用に行ってしまうと、安定もしませんし、魔法が思った通りに使えず危険です。どんな事でもそうですが、基礎の強さこそが、その人の強さに直結する物差しです」

「そうですね。変な質問をしてしまって申し訳ありませんでした」
「いえ、疑問に思った事を聞くのは大切な事です。これからも、些細な事でも疑問に思ったのなら遠慮なくお聞きください。そのための教師ですから」

二次創作の小説で、基本であるコモンマジックをやってすぐに系統の確認をして、すぐに系統魔法の修行へと移っているから勘違いしていたが、コモンマジックというのは魔法の基礎なのだ。料理でも格闘技でも日頃の基礎修業が大事なことから、魔法も基礎が大事なのは当然だ。

今の内に勘違いが正せて良かった。このまま聞いてなければ、自

分で調べて突き進んでいたかもしれないからな。

「ところで、何でも聞いていって言いましたよね」

「はい。何かご質問がありましたか？」

「ええと、ミス・クラークはどうしてまだどくし「ヴァル様？」

……ナンデモアリマセン」

とりあえず、クラークさんの前で結婚だの恋人だのといった話は絶対にしないと誓った授業初日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4408x/>

ゼロの使い魔 ～大樹の魔法使い～

2011年10月21日11時03分発行